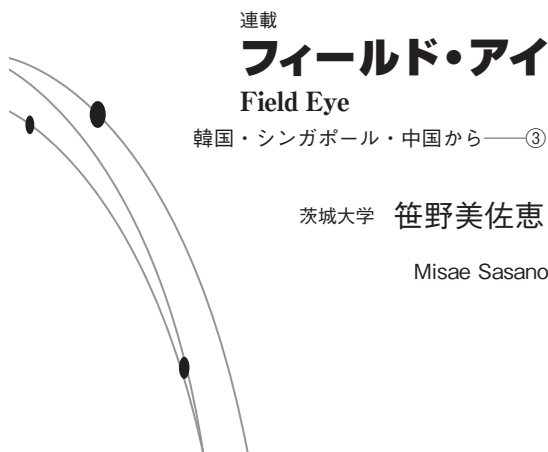




連載

フィールド・アイ

Field Eye

韓国・シンガポール・中国から——③

茨城大学 笹野美佐恵

Misae Sasano

アジア3都市における成人への移行の袋小路

——北京で「国内の外国人」として懸浮する若者たち

1 はじめに

北京の春は、黄砂とともにやってくる。街全体がぼんやりと霞む中、林立する超高層ビルと、その足元でフードデリバリーの電動バイクが縦横無尽に行き交う光景を眺めていると、この都市が抱える階層構造が静かに浮かび上がってくる。

前回の滞在地シンガポールでは、中国から移住してきた家族に出会った。彼らが母国を去った最大の理由は「子どもの教育」だったという。「中国ではまだ幼いの朝から晩まで勉強漬け。これは子どもが送る人生じゃないと思ったから」。過度な詰め込み教育で勉強嫌いになっていたその子は、シンガポールに移住してからは、のびのびと楽しく学ぼうちに息を吹き返し、エリート高校への進学を経て、今春からは博士課程に進むという。

熾烈な能力主義で知られるシンガポールでさえ「息のつける場所」になり得るという事実には、当時の私はその真意を測りかねていた。だが、実際に北京で暮らし始めた今、中国の競争の異質さを肌で感じている。14億人という圧倒的な人口規模と、それを管理する制度的構造がもたらす競争は、他国のそれとは次元の異なる重圧を伴っている。

日本のメディアは近年、中国の若者問題を「内卷(過剰競争)」による疲弊や、競争から降りる「躺平(寝そべり)」といった言葉で報じている。しかし、その視点は「都市部エリート層の競争疲れ」に偏りがち

で、背後にある構造的矛盾までは見えてこない。中国の若者の圧倒的多数は都市エリートではなく、地方に基盤を持つサイレント・マジョリティであり、彼らには都市の若者のように「競争から降りて寝そべる」という選択肢すら許されていないのが現実だ。本稿では連載の最終回として、特権都市・北京の影で懸命に生きる彼らの「就学→就業→家族形成」という成人への移行の現在地に光を当てたい。

2 就学——「小鎮做题家」の孤闘と戸籍の壁

成人への移行は、過酷な教育競争から始まる。私が北京大学で出会った学生や研究者たちは、高校時代に朝6時から夜10時まで机に向かっていた日々を、当然の通過儀礼であったかのように淡々と振り返る。「良い大学に入れば、より良い未来が開ける」。両親や教師の言葉を信じ、子どもたちは走り続ける。だが、その競争の出発点は、決して平等ではない。

ここで立ち上がるのが、中国の戸口制度である。日本語ではしばしば「戸籍制度」と訳されるが、日本の戸籍が家族関係を証明する身分登録であるのに対し、中国のそれは教育、医療、社会保障の権利を「生まれた土地」に強く縛り付ける、国家による資源配分の管理システムとして機能している。

この制度の歪みが最も色濃く現れるのは、教育の現場である。清華大学や北京大学に代表される最難関大学への進学機会は、地域ごとの募集枠や合格ラインの設定によって大きく左右される。全国统一の大学入試(高考)も、実際には地域ごとに試験科目や基準が異なり、北京戸籍を持つ受験生は地元の有力大学への切符を相対的に手にしやすい。対照的に、人口が1億人を超える河南省など地方の受験生がそうした難関大学にたどり着く確率は、北京の受験生に比べはるかに低い。

地方の若者たちは、この針の穴を通るような確率の中で、身を削る努力を続ける。そうして青春のほぼすべてを捧げ、ようやく都市の大学にたどり着いた彼らを待ち受けているのは、「小鎮做题家(地方小都市の受験エリート)」という自嘲的な呼び名だ。彼らが信じた能力主義の先には、親の経済力や人脈が静かに人生を左右する「拼爹(親の力比べ)」という現実が横たわっている。就職において企業に求められるリーダーシップやコミュニケーション能力といった要素は、多分に文化資本と結びついている。受験のために

社会経験や人間関係を犠牲にしてきた彼らが、都市部の若者が培ってきた趣味や語学力、さらには親の人脈や都市戸籍といった、受験成績では補えない資源の差に直面し、見えない壁を感じるの、構造が生んだ必然とも言える。この格差を本人の努力不足として片づけるのは、あまりに残酷だ。

3 就業——「外地人」たちの狭い出口

就学から就業への移行においても、地方出身者の前には重い扉が立ちをはかる。30年以上続いた一人っ子政策のもと、家族の期待を一身に背負った若者たちの大学進学率は飛躍的に上昇したが、それは同時に、大卒者のインフレと就職難をも招いた。かつては「努力すれば報われる」という能力主義神話が広く共有されていた。だが現在、中国の若年失業率は歴史的な高水準にあり、名門校を出たとしても、安定した職を得る道は驚くほど細い¹⁾。

運よく北京で仕事を見つけたとしても、そこで待っているのは「制度的な壁」である。どれほど北京の経済に貢献し、納税を重ねようとも、北京戸籍を持たない彼らは制度上「外地人（よそ者）」^{ワイディレン}として扱われ続ける。努力して都市にたどり着いても、その都市に根を下ろす権利は別の場所に置かれたままだ。子どもを現地の公立学校に通わせるにも、住宅を購入し安定した住まいを構えるにも、さまざまな制度的制約が立ち塞がる。同じ国の内部にしながら、制度上は都市社会の正式な成員として認められない彼らは、ある種の「国内の外国人」として生きている。

4 家族形成——親密性の余白を奪われた世代の「静かなストライキ」

移行の最終段階である「家族形成」を難しくしているのは、戸籍制度のような制度的障壁だけではない。過酷な教育競争は、若者たちから親密な関係を育む時間や経験そのものも奪っている。現地で話を聞く中で印象的だったのは、「高校まで恋愛は厳禁、大学でも学業優先を求める親が多い。なのに卒業した途端に結婚を期待される」という矛盾である。長い教育競争の中で、他者と親密な関係を育む時間や経験を十分に持たないまま成人期へと押し出される若者たちにとって、社会に出た途端に求められる結婚のハードルは極めて高い。

北京大学で出会った若い女性たちは、「結婚もしない子どもももたない。自立して生きるのが一番」と語る。それは戸籍の壁、教育競争、厳しい就職環境、そして親密な関係を育む余白の欠如が重なった末の選択であろう。過酷な競争を強いられてきた彼女たちにとって、「不婚不育」という選択は、不公平な社会に対する「静かなストライキ」とも言えるだろう。

5 結び——過剰適応の果ての袋小路

社会人類学者の項飆（Xiang Biao）は、こうした中国の若者たちが置かれている状況を「附近（身近な生活世界）^{フージン}の喪失」や「懸浮（宙吊り）^{シュエンフー}」と表現している。国家の強い発展至上主義のもとで、人々は「今、ここ」にある日常生活（附近）を犠牲にし、常に未来の成功に向かってせき立てられながら、地に足のつかない宙吊りの状態（懸浮）で生きることを強いられている。

以上3回にわたってアジアの成人への移行を見つめてきた。ソウルの若者たちは「スベックの塔」へと駆り立てられ、シンガポールの若者たちは「完璧な設計図」への適応を求められていた。そして北京では、地方から移動してきた若者たちが、制度的な排除の中で「懸浮」の状態に置かれ、根を下ろせないまま、見えない出口に向かって走り続ける。

成人への移行は、決して個人の努力だけで完結する物語ではない。教育、就業、家族形成をつなぐ道筋が、いかなる設計図によって描かれ、誰を包摂し、誰を排除しているのか。アジアの若者たちが発する静かな、しかし鋭い異議申し立ては、過剰な努力と適応を強いてきた各国の社会システムの揺らぎを示している。それは同時に、成長・競争・自己責任を前提としてきた資本主義的な社会のあり方そのものが、若者たちの生を支えきれなくなりつつあることの兆しではないだろうか。

1) 中国国家统计局の発表によれば、2026年3月の都市部16～24歳の失業率（在学中の学生を除く）は、16.9%に上る。

ささの・みさえ 茨城大学人文社会科学部講師。主な論文に“Diversity in Transitions to Adulthood: Role Structures and Gender Role Attitudes among Youth across Seven Countries,” *Journal of Asian Sociology*, Vol. 53, No. 4, pp. 421-447 (2024年) など。家族社会学、人口学、ジェンダー研究専攻。